

保護者と教師間の信頼関係構築に向けた成功プロセスモデル

The successful model of actions to create a solid relationship between parents and teachers

米澤基宏*
Motohiro YONEZAWA

尾崎啓子*
Keiko OZAKI

1. 問題と目的

近年、教師が保護者との関わり方に悩む場面が増えているといわれる(嶋崎, 2005)。激動する社会状況の中で学校と保護者・地域住民の関係は大きな変貌を見せており、時として両者の間に良好な関係性が構築されず、対立を深めている場合が見受けられる。教職員にゆとりがなく、子どもと向き合う十分な時間が確保されず、多様化する保護者からの要求や要望に対応しきれない場面も増えているのではないかと。小野田(2005)の調査によれば、対象となった小中学校・園の管理職の9割が「保護者からの無理難題要求が増えた」と回答し、その背景として「教師の能力に問題があるケースもあるが」と前置きした上で「行政による『開かれた学校』がうたわれた結果、些細なことにもクレームが寄せられるようになった」と指摘する。「モンスター・ペアレント」という造語も登場し、保護者からの理不尽な要求への対応は、学校現場における喫緊の課題の一つとなっている。

一方で「学校に協力的な保護者」の数は「変わらない」と回答している小・中学校の教師が5～6割いるという調査結果もある(ベネッセ, 2008)。

第一筆者の米澤はこれまでの教師生活で、児童の学力向上や基本的な生活習慣の定着などの教育活動を行う際、自身の力のみでは限界があることもあり、周りの教師仲間のみならず、時には保護者の方々に協力をお願いして、様々な活動を進めてきた。また埼玉県では「学校応援団」と題して地域の人材を活用する取組がなされており、教育ボランティアとして、保護者や地域に住む大学生などが授業に入り、ゲストティーチャーや学習支援員などの形で教育活動に参加協力する機会ができていた。日々の教育実践の中で感じるのは、教師を疲弊させる「困った」保護者はごく稀なケースだということである。

児童のより良い成長を願うのは保護者も教師も同じである。また子どもたちにとって、身近な大人の存在といえれば保護者と教員である。両者が協力すれば、子どものさらなる可能性を拓けられるのではないかと考える。

そこで本研究では、教師と保護者が双方の信頼関係の

構築についてどのような意識を持っているか実態を調査し、立場の違いによる意識のズレの有無とその内容を明らかにすることを目的とする。調査結果の検討を通して、教師と保護者の良好な信頼関係の構築成功プロセスモデルの作成を目指す。

本研究における「信頼関係」の定義は、大辞林などの辞書の定義を参考にして「過去の経験や事実に基づき、相手のことを疑いなく信じて受入れ、たのみにし、お互いを理解・尊重しあえる関係」とする。

2. 方法

教師と保護者を対象とした質問紙調査と、有志の教師を対象とした面接調査を行った。

2.1 対象

質問紙調査は、埼玉県A市立B小学校の保護者235名(回収率86.7%)と埼玉県内の小学校28校の教師285名(回収率64.3%)。面接調査は小学校教師10名(男性4名、女性6名)。

2.2 調査時期

保護者は2010年2月下旬から3月上旬。教師は2010年3月。面接調査は2010年7月～8月。

2.3 実施の手続き

保護者調査については、校長が協力依頼に応じてくれた1校で実施した。全学年の各担任から児童を通して質問紙を配布し、協力を得られた保護者から回収した。同じ学校に兄弟姉妹がいる家庭は、重複しないよう留意した。配布時には保護者あての文書を校長名で添付し、回収時には、質問紙とともに配った回収用封筒に用紙を入れて封をした状態で集めた。

教師調査では、第一筆者が以前同じ職場で勤務していた教師たちの所属校に協力を頼んだ。また第二筆者らの紹介などを通じて知り合った学校の教師に質問紙を郵送し、約1ヶ月後を目安に郵送で回収した。原則無記名だが、面接調査の協力者を募る趣旨を兼ねたので、協力可能者には氏名と連絡先を記入してもらった。調査は埼玉県教育委員会に確認をとり、了解をもらった上で実施した。

* 越谷市立北越谷小学校/埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター研究員

** 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

面接調査は、質問紙調査に記名のあった教師全員に調査依頼書を送付し、後日協力者の希望の日時、場所において行った。

2.4 質問紙調査

保護者と教師の信頼関係についての意識の実態を調べる目的で、フェイスシートと自由記述による調査を実施した。保護者調査の質問項目は、フェイスシートとして、性別、年代、職業の有無、小学生以上の子どもの人数、一番上の子どもの学年、教師との信頼関係の必要性の程度、の6項目、自由記述として、教師と信頼を深めるために心がけていること、教師や学校を信頼できること、教師への信頼を深めるために学校に希望すること、教師との信頼関係を深めるために必要だと考えること、の4項目、合計10項目とした。

教師調査の質問項目は、フェイスシートとして、性別、教職年数、学校カウンセリング研修歴、所属校のクラス数、児童の居住する地域の特徴、対応が難しいと感じた保護者の有無、信頼関係の必要性の程度、その他、教師が苦手とする保護者の傾向をつかむため、嶋崎（2005）のクレーム10類型を参考に作成した、対応が難しいと感じる保護者のタイプ、の項目を加え、計8項目について尋ねた。自由記述では、保護者と信頼を深めるために心がけていること、保護者から信頼されていると感じるとき、信頼を深めようとする中で難しさを感じる時、信頼関係を深めるために必要だと考えること、の4項目を設定し、合計12項目とした。

分析は、埼玉大学で臨床心理学を学ぶ大学院生および臨床心理学を専門とする大学教員各1名と協議して、回答を得た自由記述を項目ごとに切片化し、KJ法による分類を行った。

2.5 面接調査

調査に協力できると記名のあった対象者に行った。面接時間は1時間で、半構造化面接とした。主な質問項目は、氏名、所属校名、年代、教職経験年数、経験学校数のフェイスシートの他、質問紙調査の結果への感想とともに、保護者と信頼関係を深めるために日ごろ心がけていること、教師自身が信頼関係を築きやすいと思われる保護者のタイプ、保護者とうまく関係が作られたと思われる事例と一度トラブルになりそうになった後、関係がよくなった事例などである。

2.6 成功プロセスモデルの作成

教師と保護者対象の質問紙調査の結果から、両者の信頼関係づくりに関する自由記述を切片化したものに表札づけを行った。面接調査で得られた事例も含めて、教師側、保護者側それぞれのアプローチ法を中心に考えて検討し、具体的な行動という観点から、信頼関係構築を目指すプロセスモデルを作成した。このプロセスモデルは時系列順に進むものではなく、関連要因がサイクルのように展開していくことを想定した。

3. 結果と考察

〔保護者調査〕B小学校は都内から通勤可能な距離にある衛星都市に立地し、比較的落ち着いている中規模校である。回答者の性別は、女性219名(94%)、男性15名(6%)で、圧倒的に女性(母親)が多かった。年代別では30代105名(45%)と40代(49%)で全体の94%を占めた。有職率は65%であった。子どもの人数は「1人」が96名(41%)、「2人」が115名(49%)だった。教師との信頼関係が大切かとの問いには、「とても思う」「少し思う」が合わせて98%であった。有職者と無職の保護者との比較では、「とても思う」と回答した有職者は82%、無職者は93%で、有職者の方が信頼関係の必要性をそれほど重要視していない傾向にあった。

保護者が教師と信頼関係を深めるために心がけていることでは、連絡帳や電話、直接話すなどの方法で個別に関わる『直接交流・個別のコミュニケーション』が43%、お便りを読む、行事への参加など受動的に関わる『直接交流・受動的行動』が22%、子どもからの情報を取り込む『間接交流・子どもを通した関係づくり』が7%で、直接的な交流を挙げた回答が多かった(図1)。

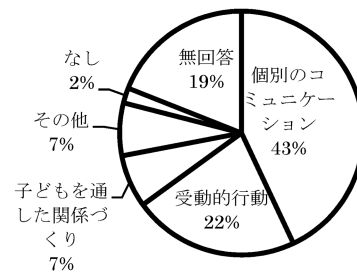


図1 信頼関係づくりのために保護者が心がけていること

保護者は、意識的には、教師との信頼関係を構築するために直接的なコミュニケーションをとることを重要視していると考えられる。しかし、仕事を持つ保護者の回答からは、実際に教師と交流する機会の少なさや、子どもの教育に関わらないといけないという意識はあるが難しさも感じているといった部分が垣間見られた。教師は、子どもの成長を願い、教師との直接的な交流を希望して積極的になっている保護者の考えを受け止め、できるだけコミュニケーションをとるようにしたり、忙しい有職者への配慮もする必要があるだろう。

次に、教師や学校が信頼できると感じるときは、「子どもが休んだ時に電話をくれる」「何かあった時に事実を話してくれる」など『直接的な関与』が36%、「先生と子どもの話の内容が同じだった」「どの子に対しても同じように声をかけている」「親の顔をうかがわずに指導している」など客観的で距離のある『観察的な関与』が33%、「子どもが先生を信頼しているから」「子どもが先生を好きなので」など子どもを通した関わりの『間接的な関与』が11%であった(図2)。

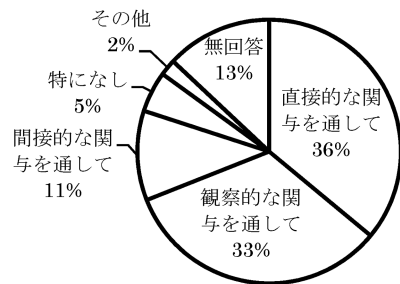


図2 保護者が教師を信頼できると感じるとき

保護者は、子どもの話を鵜呑みにするのではなく、教師との直接的な交流から保護者自身の考え方や意識などのフィルターを通して教師への信頼感を判断していることが考えられる。新(2007)は「子どもの日常の姿のみから学校での様子を判断し、教師への不信感が生まれてくるケースが多い」と指摘している。教師が保護者と直接接することの重要性は、このことから示唆される。

教師に希望することでは「子どもとたくさん話してほしい」「子どもをよく見てほしい」など『間接交流・子どもへの対応』が32%、「子どもについて気づいたことや心配なことがあったら遠慮なく話してほしい」「面談・家庭訪問を多くしてほしい」など『個別の直接的な関わり』が22%、「子どもたちにとって尊敬できる人柄」「親身な指導」など教師としての高い倫理性を求める『教師の人格・意識』が11%であった(図3)。ただし、昨今の教師に対する批判的な論調とは正反対で、応援するニュアンスのある回答が多かった。全体的には、保護者への配慮というよりは子どもに対する指導や対応に関する期待が多数であった。

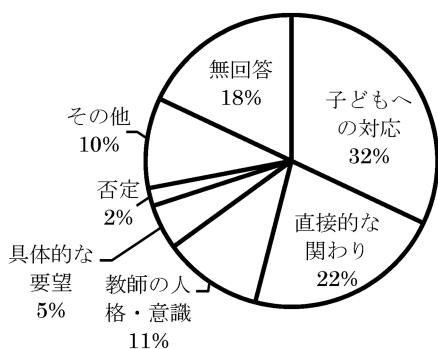


図3 教師に希望すること

信頼関係の構築のために相互が必要な事については、「日ごろからのコミュニケーション」や「会話」など『日常的な関わり』が32%、「お互いが相手に対する思いやりをもって行動する」など『意識・相互努力』が33%、「子どもへの対応」が8%で、直接的な関わりやお互いの努力の必要性を挙げる人が多かった(図4)。

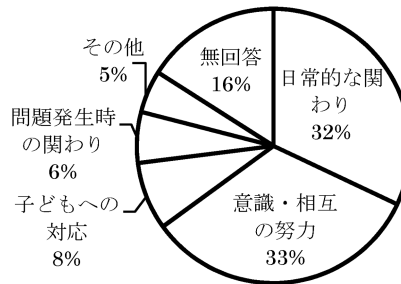


図4 信頼関係構築のために相互が必要なこと(保護者)

[教師調査] 回答者の男女比は女性160名(62%)、男性106名(38%)だった。教職経験年数5年以下の教師が78名(29%)、6年以上10年以下が35名(13%)、11年以上15年以下が17名(6%)、16年以上20年以下が18名(7%)、21年以上25年以下が21名(9%)、26年以上の教師が98名(36%)であった。この比率は、2009年埼玉県年代別小学校教員構成比率とほぼ同じ傾向だった。

学校カウンセリングに関する研修歴が「なし」の教師が20%いた。年代別では、経験年数5年以下の教師の研修率が低かった。

学校の規模別でみると、6学級以内の単学級が7%、7~12学級が10%、13~18学級が35%、19~24学級が32%、25学級以上の大規模校が16%であった。保護者対応に困難が「ない」と答えた教師は、有意差はなかったものの単学級の学校の教師に多い傾向が見られた。小規模校では、子どもや保護者に対する教師の目や対応が行き届きやすかったり、地域での支え合いが活かされているといった面もあるのかもしれない。

所属校のある地域の特徴は、団地や一戸建てなどが「混在する」と回答した教師が全体の54%を占めた。

保護者との信頼関係が大切かとの問いには、「とても思う」「少し思う」が合わせて100%だった。

対応が難しいと感じた保護者の経験は、「ある」が89%、「ない」が11%だった。「ない」と回答した教師のうち59%が教職年数5年以内の教師であった。教職経験が少ないと、出会った保護者の数も少ないことが、理由の1つと考えられる。

対応が難しいと感じる保護者のタイプでは、「心の問題を抱えていると思われるタイプ」が最も多く、全体の22%を占めた。以後「溺愛・過保護で教師を親子共通の攻撃対象とするタイプ」17%、「学校に対して無関心」13%、「細かい事にこだわる」10%という順に続き、全体の中でこの4項目が占める割合が突出していた(図5)。

心の問題を抱えている保護者については、うつ病や神経症といった精神疾患から、医師からの診断はつかないが何らかの不調を抱えている状態まで様々であると推測される。専門知識がないと対応が難しいケースも多く含まれていると考えられるが、教師は目の前の困っている人を見ると、自分が何とか支えなければと考える傾向が

強い。楠本（2008）は「教師が支えないと、と思ってしまおうとどんどん依存関係の中に引き込まれ、にっちもさっちもいかない状態に追い込まれてしまうこともしばしばある」と警告している。教師ひとりの力には限界があること、専門性の異なる問題に対する対処についての研修機会や関係機関との連携体制は未だに乏しいことなどを考慮すると、配慮が必要な保護者への対応は、学校全体の課題として取り組む必要が大であろう。身近な専門家としてのスクールカウンセラーとの連携も重要である。

「溺愛」は我が子かわいさゆえの行動である。子どもは子どもで、何をしても親がかばってくれるととらえて我儘になりやすい。教師が保護者とその子どもとの共通の攻撃対象になることで子どもとの関係を維持する保護者の存在も考えられる。吉田（2006）は「教師の視点とは、子どもを他の子ども集団との相対的な関係の中で見るような視点であり、保護者の視点とは、逆に我が子を中心にして周囲を見るような視点である。」と述べている。自分の子どもだけを育てている保護者は、我が子の言動を基準にするため判断材料が少ないが、教師は全体の中で子どもを見ているため、保護者からの関わり方に自己中心的なものを感じ取ると、「対応が難しい保護者」と受け止めるのかもしれない。

「無関心」は、たとえば教師が自分の指導方針を伝えたり協力をお願いしても全く反応が無い、コミュニケーションがとれない状態では、意識のズレや不信感が生まれやすいのではないのか。

「細かいことにこだわる」については、学級経営の方針を立てて集団として動こうとしている中で、一人の保護者の意見によって計画が中止や変更になるようなことがあった場合に、教師が保護者の意見を気にし過ぎて動けなくなるといった悪影響が考えられる。

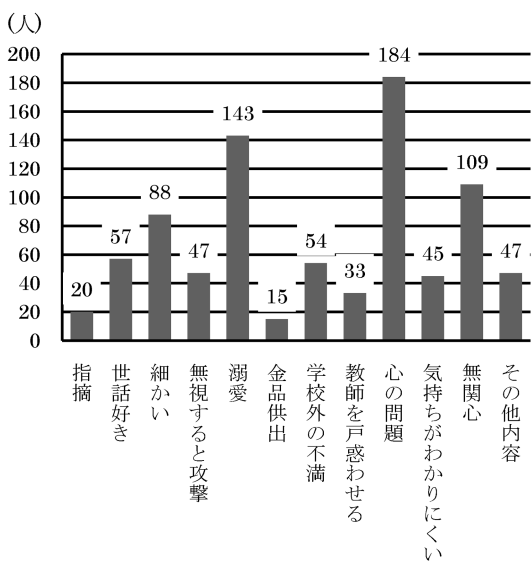


図5 対応が難しいと感じる保護者のタイプ

続いて、タイプの内容を教師の年代別に見ると、全体的に「心の問題」と「溺愛」が多いが、教職経験15年以内の教師は「無関心」「気持ちがわかりにくい」などの、教師側からのアプローチに対して反応が薄い、気持ちの把握が困難な保護者に苦手意識を持っていることがわかった。一方、経験21年目以降のベテラン教師は「善意で児童の迷惑行為や設備上の欠点を指摘するタイプ」「世話好き」「細かいことにこだわるタイプ」など教師や学校の教育活動に意見を表明する保護者に苦手意識を持つ傾向があることが判明した。

保護者と信頼関係を深めるために心がけていることは、「日常の挨拶や声かけ」「学級懇談会や学級通信などのお知らせでクラス全員の保護者に学級経営方針などを伝える一斉対応」といった『直接交流』と、「個別の指導支援の充実」や「一斉授業・生徒指導など子ども全体への対応」といった『間接交流』の2つに分けられた（表1）。

『直接交流』の記述には「伝達」「情報発信」「学校公開」といった開示を表す単語がキーワードとしてよく登場し、保護者と積極的に関わろうとする姿勢が伝わってきた。また意識としては、子どもを通した間接的な交流よりも保護者との直接的な交流を大切にし、コミュニケーションをとることを通じて関係づくりを図っている様子がうかがえた。

表1 信頼関係づくりのために教師が心がけていること

項目	サブカテゴリ	数 (件)
直接交流	日常的対応	117
	保護者への一斉対応	65
	より丁寧な日常的対応	56
	問題発生時の対応	60
間接交流	子どもへの個別対応	19
	子ども全体への対応	18

教師が信頼されていると感じるのは、保護者からの直接的な言葉や態度を通してということがもっとも多く、内容としては、「来年も担任をして欲しいと言われた」や「教え子の成長を報告してくれた」「感謝の表現があった」「保護者の悩みを相談してくれる」などであった。

一方、信頼関係を深める中で難しさを感じたことや困った経験についての項目は、『相互要因』『教師側の要因』『保護者側の要因』の3つに大別された（表2）。相互要因を挙げた者が7割弱いたが、保護者より年齢が若い場合の助言の話しづらさや家庭の事情にどこまで踏み込んでよいのか判断に迷うといった、教師の経験不足、力量不足に関する記述も見られた。保護者側の要因としては、マイナス思考や何でも人のせいにする認知・性格傾向、経済事情や精神的な病気など教師の専門性だけでは関わりにくい課題が挙げられ、外部機関との連携強化の必要性が浮かび上がった。

表2 信頼関係を深める中で感じた「難しさ」と困った経験の要因

項目	サブカテゴリ	数 (件)
相互要因	誤解	38
	過剰な子ども重視	31
	常識・価値観の違い	29
	アプローチ困難	26
	保護者の一方的主張	23
	学校不信	6
教師側の要因	経験不足	21
	力量不足	16
保護者側の要因	性格特性	26
	家庭内事情	21
	精神的健康	13

信頼関係の構築のために相互が必要な事については、「子どもへの指導」「子どもとの信頼関係」など子どもへの対応や、「まめな連絡」「子どもの課題や成長の共有」など、日常的な関わりを通して保護者と信頼関係を作ろうとする傾向があった(図6)。「誠実な対応」「思いこみで動かない」など教師の努力が大切とする意識も見られた。

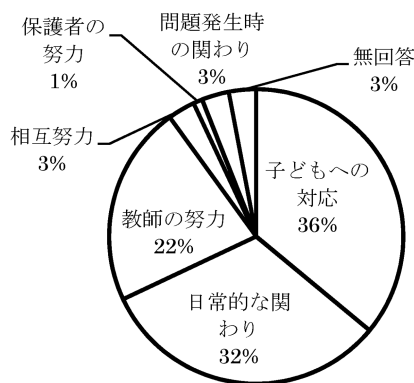


図6 信頼関係構築のために相互が必要なこと (教師)

[比較] 教師、保護者ともにお互いの信頼関係は大切であるにとらえていた。また普段から「直接的な交流」を重要と考えている人が多く、それが良好な関係維持に役立っていると感じている。さらに、教師は保護者の具体的な言動から信頼されていると感じる事が多いが、保護者は、教師の直接的な言動の他にも、子どもの言動、行事等で学校に出向いた際に感じたことなどを基に、信頼できる教師かどうかを判断していた。

信頼関係の構築のために相互が必要な事については、「日常的な関わり」は共通していた。しかし、保護者はともに努力するという点に着目しているのに対し、教師は子どもへの対応や問題発生時の関わり、日ごろからの意識の持ち方・努力など、自分の力のみで何とかしなくてはならないとする傾向が顕著に見られ、この点に両者

の考え方のズレが生じていることが推察された。

[面接調査] 諸富・植草 (2004) の「信頼関係は本来は相互作用である。しかし、教師は自分の行為によって信頼されたり信頼されなかったと考えるべきである。」という指摘をもとに、事例を教師の行った行動の観点から分析した。良好な関係構築のきっかけとなった教師からの働きかけとして [パートナーとしての契約] [指導方針の決定] [日常会話での情報収集] [相互のねぎらい・評価] [問題に対する相談] [問題の共有] の6要因を抽出した。[パートナーとしての契約] は、信頼関係がまだ構築できていない状態でも、とりあえず一緒に問題に取り組もうというパートナー関係となり、協働して子どもの支援にあたる働きかけを指す。教師、保護者ともに自分の価値観の押しつけではなく、相手の立場に立った行動と意識の改革が求められる。[指導方針の決定] は、教師主導で方針を決めて保護者に伝えることにより問題に対する対応を明確にする対処行動である。教師が保護者の考えや思いを聞きいれながら進めることが大前提だが、学校からの情報提供が主な場面となる。[日常会話での情報収集] は、直接顔を合わせて話すことにより、コンタクトが多くなる利点がある。運動会や参観日などの学校行事だけでなく、地域のお祭りといった接点を大切にし、気軽な挨拶や立ち話など普段からのコミュニケーションを大事にする。[相互のねぎらい・評価] は、保護者の子育ての不安の解消や自信を持ってもらうために保護者をねぎらう言葉をかける行為などである。保護者からもねぎらわれ評価されると、より良い関係に向かえる。教師と保護者が連携して子どもへの支援を行う場合も、うまくいったことを共有することがさらなる効果を生むと考えられる。[問題に対する相談] は、保護者の心労や不安をくみ取るべく会う機会を増やし、不安解消を重視して相談をうける活動である。この場面では、[指導方針の決定] とは逆に、保護者が主体で相談行動を起こすことが重要となる。教師はカウンセリングマインドをもって傾聴と支援に徹する。[問題の共有] は、保護者からの相談を受け、悩みを共有することや保護者の思いを知ることが、一緒にがんばろうという姿勢や意識が生まれるきっかけとなることを示す。保護者には心を開いて話すことが求められ、教師には相手の立場に立って共感的に話を聴くことが求められる。

その他、トラブルからの関係修復に有効な行動特徴として、何をやってもうまくいかない時に [子どもの指導に徹する]、学校で事故などが起こった場合の [誠意ある謝罪と校長のリーダーシップ]、感情的になった保護者への対応としての [傾聴]、[教師と保護者の意識のズレへの気づきと対応] の4点が見出せた。

田坂 (2003) は、母親との信頼と協力関係を構築するには「客観的事実の伝達」「共通した視点による問題の共有」「共同での問題整理」が重要とし、このために「母親への励まし」「一緒に指導しようとする気持ちの伝達」「母

親の悩みを聞き、それを理解しようとする姿勢の呈示」といったポイントを挙げている。本研究の結果と類似点が多く、意識・姿勢・行動の重要性が示唆された。

〔成功プロセスモデル〕保護者調査、教師調査（質問紙と面接）の結果を分析・検討し、信頼関係構築に有効なプロセスモデルとして、〔パートナーとしての契約〕〔指導方針の決定〕〔日常会話での情報収集〕〔相互のねぎらい・評価〕〔問題に対する相談〕〔問題の共有〕の6要因がサイクルを成す展開を想定した（図7）。このモデルの特徴は、どの行動要因からでもスタートでき、①時系列の順番に進むものではないこと、②すべての要因がそろってなくてもよいこと、③どれか1つの要因を常に心がけている行動でもよいこと、の3点である。どれも具体的な行動なので、いつでもどこからでも、できることから始めることが肝要だと考える。

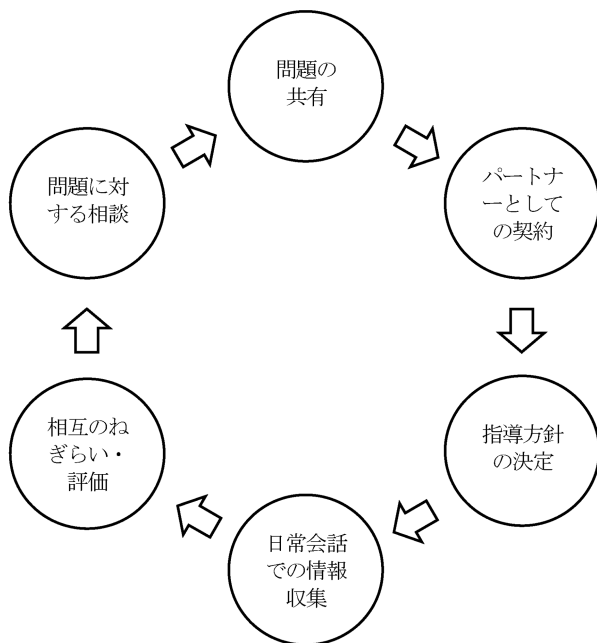


図7 信頼関係構築への成功プロセスモデル

4. 総合考察と今後の課題

質問紙調査の結果から、教師も保護者も子どもを育てていく上で両者の信頼関係は必要であるという意識は一致していたが、信頼関係構築のための方法面では考え方にズレがあることが判明した。保護者は教師との直接的な関わりや相互の努力を通して信頼関係の構築を心がけているが、教師は子どもとの信頼関係の構築を重視していた。子どもを教師と一緒に育てていきたいとする保護者と、学校での子どもの教育は教師の自助努力で行うとする教師との考え方や姿勢の相違は、些細な言動や言葉のとらえ方の違いなどによりトラブルの発生のもとにもなりかねない。新（2007）は、「トラブルを生じさせない教師と保護者との関係性では、子どもを中心におくことが両者の連携の鍵になる」と指摘している。保護者とト

ラブルが生じた時は子どもへの指導や子どもとの信頼関係の構築が重要となるという指摘は今回の調査結果とは逆になっているが、新（2007）の研究はトラブルが生じた時の事例を元に調査を行っている。しかし、今回の調査結果からは、保護者が教師と出会ったばかりの頃や、教師について知ろうとしている時、ある程度教師と良好な関係を築いている場合には、保護者は子どもへの対応の期待よりも、普段から気さくに教師と話せる環境や個別の直接的な関係を望む傾向にあることが示唆された。特に発達障害など子どもの状態に不安のある保護者には、こういった傾向が強いのではないかと推察される。

特別な教育ニーズをもつ児童は、日常生活の中で困る状況に陥りやすいと思われ、その保護者も子育ての上での困惑やストレスを抱えている可能性が高い。田村ら（2007）は「保護者は子どもにどのように関わったらよいのか具体的な方策を知りたいというニーズを持っている一方、保護者が疲弊しているときに親の苦しさを十分にわかってもらえないという保護者の声も聞かれる」と述べている。保護者の置かれた状況によっては、ストレスに対するねぎらいの言葉や励ます配慮が必要であろう。特別な教育的支援を要する児童の保護者にとっては、教師とのパートナーシップの関係構築は非常に重要であると思われる。たとえ特別支援教育に関する教師の知識が乏しくとも、「私は専門家ではないので。」と言って免責することなく、何かできることをしていきたいという姿勢を示してこそ保護者からの信頼を得られるのではないかと考える。教師と保護者が上下関係になることなく、それぞれの立場や専門性を活かして、よきパートナーとなろうとする意識と態度を保ち、子どものために協働することが必要である。

今回の調査結果については、教師、保護者の双方に伝えて、共通認識と意識の相違点がどこにあるかをお互いに理解することが信頼関係づくりに有効ではないかと考えている。両者に寄せられる期待と実際のズレに気づくことが、関係づくりのスタートとなるといえよう。気づきと理解の次に、どのような行動が信頼関係構築に役立つかについて、成功プロセスモデルとして、サイクルで展開する模式図で提示した。教師と保護者はどの行動要因からでも取り組むことができる。すべての要因がそろってなくても、できることを重点的に行うことで、良好な関係に向けて動き出せる。もし一度関係が崩れたとしても、修復をどの要因から模索することも可能であろう。このモデルが学校現場でどのように活用できるかを、今後の教育活動の中で確かめていきたい。

今後の課題として、①成功プロセスモデルの妥当性の検討・検証、②保護者調査の充実、③教師調査の充実と発展、の3点を挙げたい。成功プロセスモデルは、学校現場での事例に当てはめたり現職の教員と実践、検討することで妥当性を検証する必要がある。また、今回の保護者調査校は比較的落ち着いた学校であり、協力的な保

護者が多かったので、今後タイプが違う学校における調査を行い、本研究の結果と比較検討することが重要であろう。さらに、教師調査も対象者を県外や学校種を変えて設定することにより、意識のズレに関して掘り下げ、教師のパーソナリティの関与の程度などについても理解を深めることが望まれる。

本研究の成果が、特にコミュニケーションに課題を感じている若い教師への、保護者理解と関係づくりの一助となることを願っている。

【参考文献】

- 新学 2007 教師・保護者間のパートナーシップ構築に関する研究～教師と保護者の意識のズレに関する質的分析、兵庫教育大学大学院修士論文未刊行
- 小野田正利 2005 学校へのイチャモン急増と保護者対応の現状 教育アンケート調査年鑑（下）、創育社 pp. 179-189
- 楠本凡之 2008 「気になる保護者とつながる援助 「対立」から「共同」へ」かもがわ出版
- 嶋崎政男 2005 「困った親への対応～こんなときどうする」ほんの森出版
- 鈴木淳子 2002 「調査的面接の技法」ナカニシヤ出版
- 田坂宣文 2003 担任と母親の協力関係を築くために ～共に歩む、児童心理、第57号、pp. 72-79
- 田村節子・石隈利紀 2007 保護者はクライアントから子どもの援助のパートナーへとどのように変容するか～母親の手記の質的分析、教育心理学研究、第55号、pp. 438-450
- ベネッセコーポレーション 2008 第4回学習指導基本調査報告書・小中学校を対象に、ベネッセ教育開発センター
- 諸富祥彦・植草信之 2004 「カウンセリングテクニックで極める教師の技」第2巻 保護者とうまくつきあう40のこつ、教材開発研究所
- 吉田美沙 2006 教師が保護者との間に感じるズレとは何か、兵庫教育大学大学院平成18年度学位論文集、29、pp. 186-220